

ガン・カモ一斉調査30周年を総括して

日本野鳥の会福岡 代表 小野 仁

1. はじめに

水辺の環境を正確に把握する目的で、財団法人日本野鳥の会は1982年から「ガン・カモ・ハクチヨウ類全国一斉調査」を開始した。その後、全国的に進行した環境悪化を確認する必要性から、森林、草原、干潟などを含めた調査が必要となり、1993年から野鳥生息モニタリング調査が開始されることとなり、野鳥の会が実施してきた一斉調査は1992年で終了されることとなった。

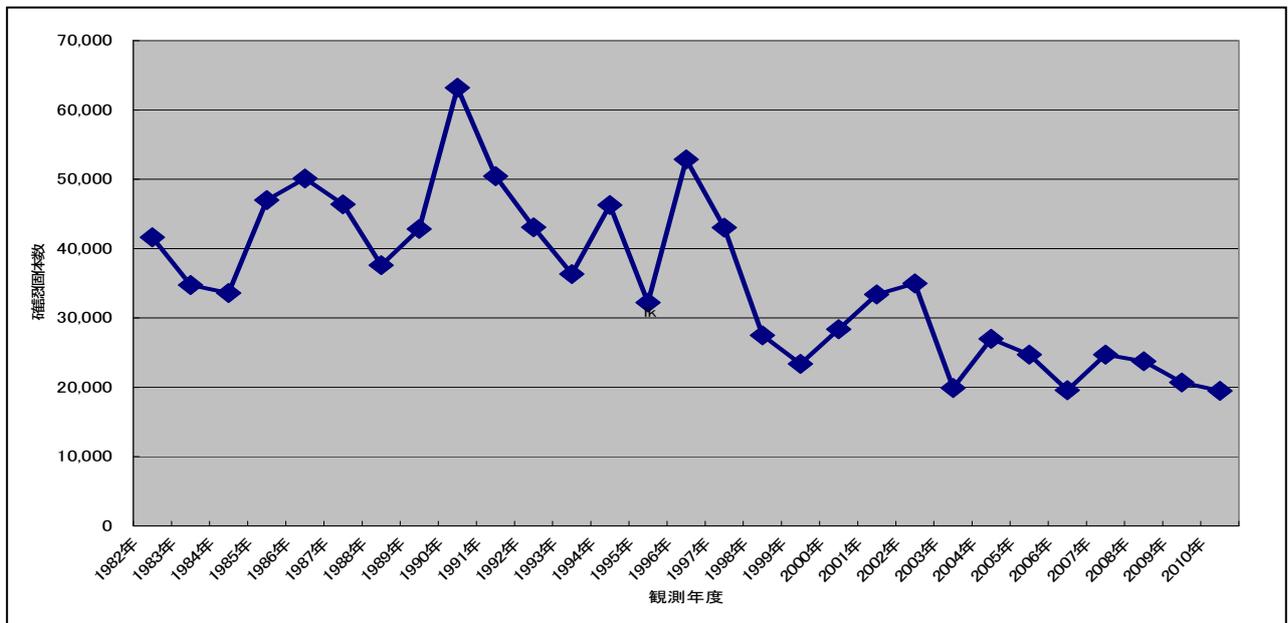
福岡支部では、継続調査が重要であると判断し、1993年度からも継続して調査を実施した。当初、1月15日を調査日としていたが、1996年からは休日の変更により1月中旬に実施することにした。

2011年で30周年を迎えたことから、この間の調査結果をまとめることにした。

2. カモの飛来数の変化について

2-1. 福岡市および周辺の確認総数

この30年間に確認されたガン・カモの総数を下図に示した。埋め立てによるため池の減少、観測員の増加によるダブルカウントの撲滅などにより、単純には比較できないものの、減少傾向がうかがえる結果がえられた。



図一 福岡市および周辺で確認したカモの確認個体数の経年変化（総数）

2-2. 室見川河口部では

福岡市の中央部を流れる室見川は、シロウオ（素魚）が遡上する河川として有名である。この河口部は、福岡市による埋め立てなどにより大きく変化している。30年間の調査結果のうち、カモの総数とマガモ・ヒドリガモ・ホシハジロの個体数の変化を図一2に示した。



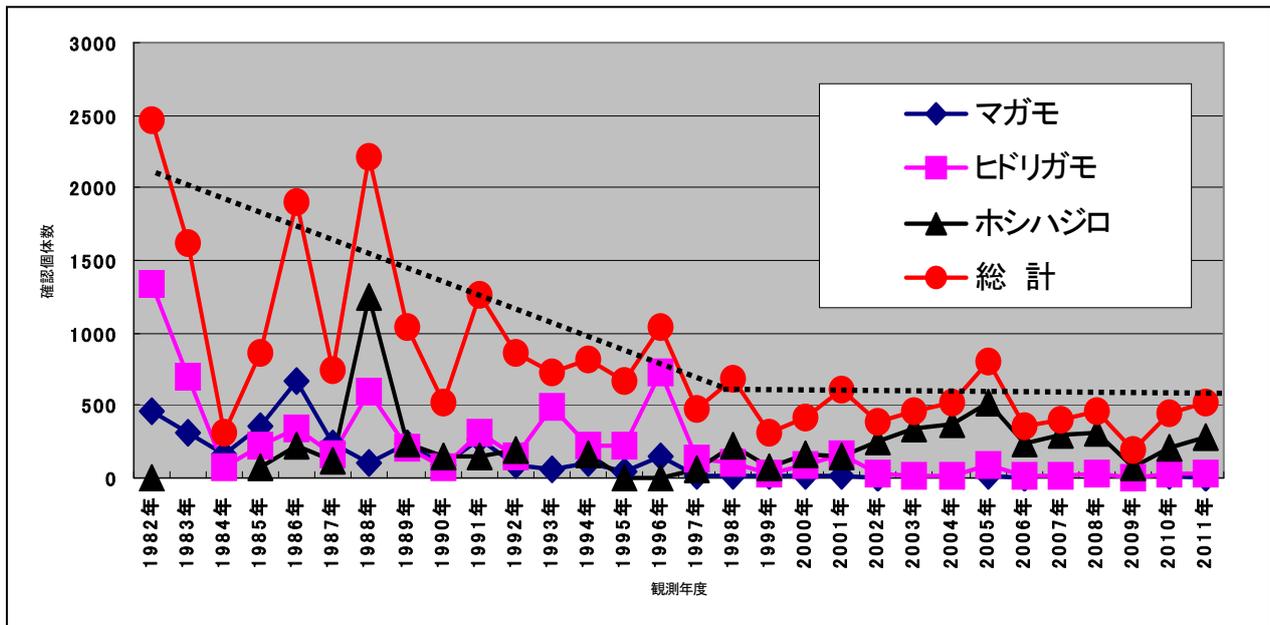
マガモ



ヒドリガモ



ホシハジロ



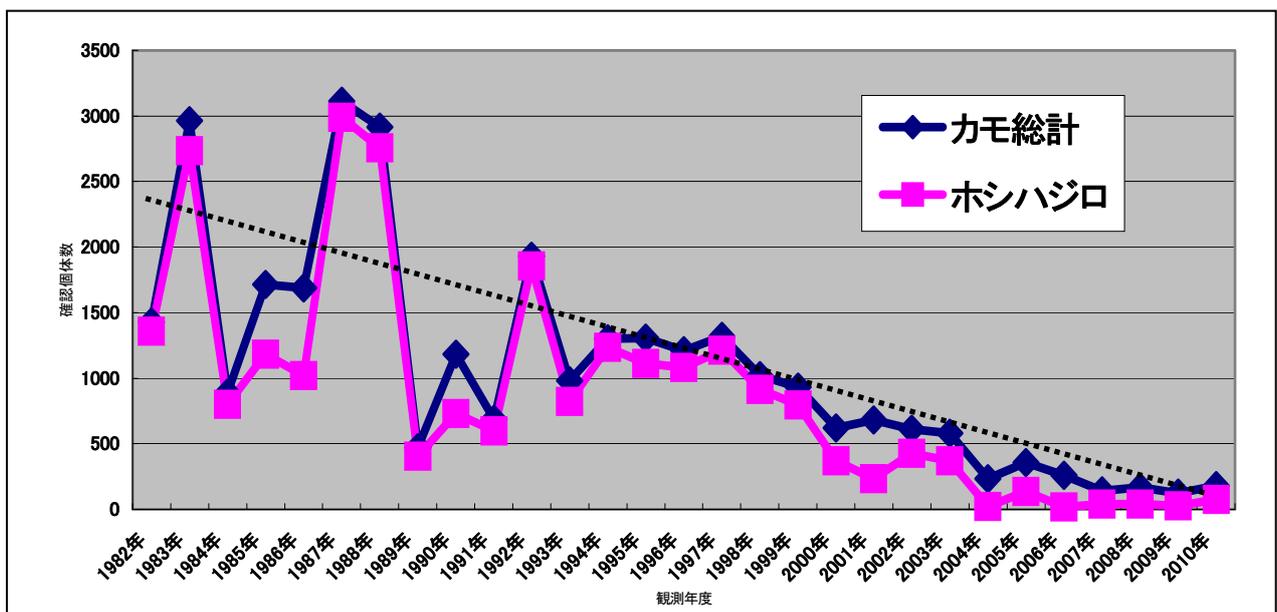
図一 2 室見川河口部で確認したカモの確認個体数の経年変化

1995年までは観測日を固定していたため、天候などにより確認個体数が大きく変化するが、1982年、1988年は2000羽を超えるカモを確認している。全体的には、1997年までは確認個体数が徐々に減少していることが伺える。また、ヒドリガモやマガモの減少が、総数の減少の原因であることが分かる。1998年以降のカモ類の総数は500羽前後で推移しているが、平均でその半数(52%)はホシハジロで占められている。

## 2-2. 大濠公園では

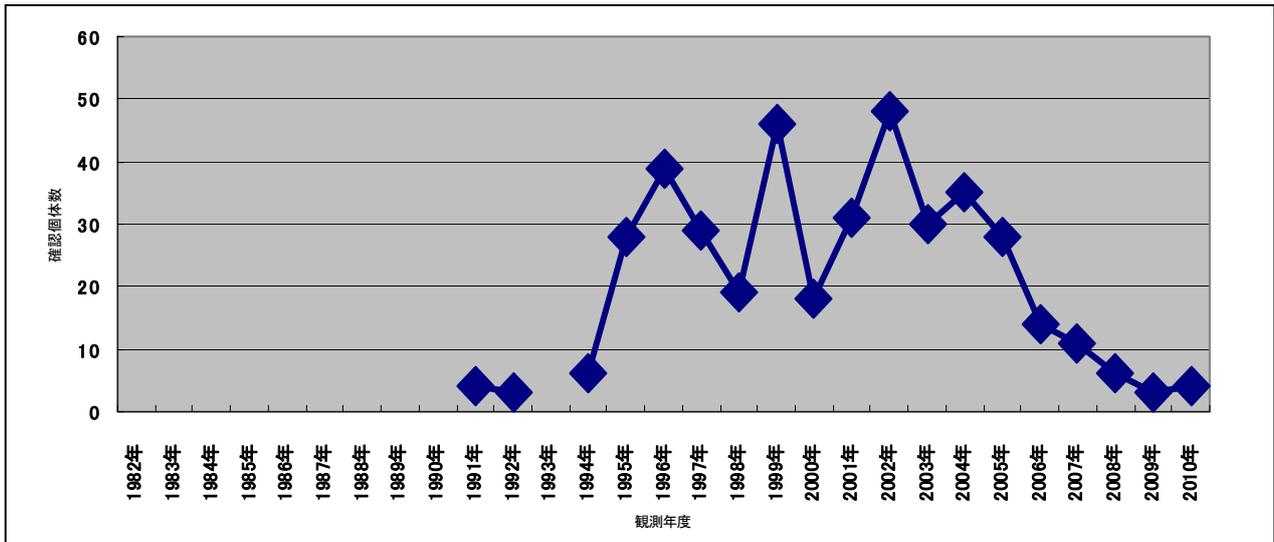
室見川と同様に天候に左右されたため、1995年ころまでは個体数が大きく変化する。しかし、図一3に示すようにカモ類の減少傾向は明確で、冬になると水面はカモで埋め尽くされた感があったが、近年では容易にカウントできるようになった。

2000年までは個体数の大半をホシハジロが占めており、カモ類の減少はこの種の現象に左右されていることが分かる。1889年には総数で3115羽を確認しているが、その96%にあたる2991羽がホシハジロである。



図一 3 大濠公園で確認したカモの確認個体数の経年変化

カモの種類に着目すると、メジログモ、アカハジロ、アカハシハジロなどの珍鳥を含み 15 種が確認されているが、近年オカヨシガモが毎年確認されている。オカヨシガモの個体数の変化を図一 4 に示したが、この種は 1991 年にはじめて確認された。



図一 4 大濠公園で確認したオカヨシガモの確認個体数の経年変化

### 3. あとがき

福岡市内及び周辺地域で実施しているガン・カモ・ハクチョウ類の一斉調査は、多くの会員の協力を得て 30 周年を迎えた。今回、室見川、大濠公園を代表としてこの間に個体数が減少していることを示したが、全地点で同様の傾向が明瞭になってきている。

この現象は気候変動に起因するとの意見も聞かれるが、多くの要因が関与していると考えられ、早急に結論を導き出すことは難しいと思われる。

しかし、カモ類の個体数減少が我々の生活に警鐘を鳴らしている可能性を否定できないことから、正確なデータを把握して因果関係を明確することが重要である。したがって、これからも継続して一斉調査を実施し、その結果を事実として発信しようと考えている。



大濠公園で減少しているキンクロハジロ



これも減少しているハシビロガモ